

明治・大正・昭和期の新聞記事にみる 江戸城外濠・内濠

渡邊 翔太¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2丁目33, E-mail: shota.watanabe.3b@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2丁目33, E-mail: fukui@hosei.ac.jp)

江戸城外濠は文化財でありながら水質汚濁や埋立により当時の歴史ある面影を失いつつある。一方で、江戸城内濠は環境改善への活動や利活用等で外濠よりも良好な環境を維持している。このように旧江戸城を囲む二つの濠は社会的な扱いに差が見られる。本研究では、その時代の現状を反映するメディアとして新聞記事に着目し、外濠・内濠に関する新聞記事の見出し、内容から濠周辺での出来事を時代ごとに整理し、濠をとりまく状況や社会的状況について二つの濠を比較しながら考察することを目的とする。その結果、内濠では大きなニュースがなくても濠の様子が取り上げられている一方で、外濠では埋立や公園計画など大きなニュースがないと記事は見られないことを指摘した。

キーワード: 江戸城, 外濠, 内濠, 新聞記事

1. はじめに

(1) 研究背景

江戸城外濠は、江戸城の防衛のみならず内濠や東京湾、神田川、玉川上水と一体となって城下町江戸の貴重な水路・水空間・舟運路としての基盤であった。1636年の構築から約400年経った現在もその一部である約4kmが水面として維持されている。

しかしながら、関東大震災や第二次世界大戦後の瓦礫処理に伴う大部分の埋立、首都高速道路用地への転用などが進み、残っていた水面についても下水流入に伴う汚濁や悪臭が問題となってきた。これらにより江戸・東京にとって外濠が持つ歴史的意味、都心における貴重な水空間としての価値も失われつつある。今後外濠の環境改善を目指す上で、このような状況に至った社会的背景を把握することは重要であると思われる。

一方で江戸城内郭に位置する内濠は、外濠と同様に水質等の問題を抱えながらも、水質浄化や環境改善が進み外濠よりも良好な環境を維持しており、このように旧江戸城を囲む二つの濠の現状に差が見られる。

(2) 目的

本研究では、その時代の状況を反映するメディアとして新聞記事に着目する。外濠・内濠に関する新聞記事の見出し、内容から濠周辺での出来事を時代ごとに整理し、濠をとりまく状況や社会的状況について二つの濠を比較

しながら考察することを目的とする。

(3) 研究方法

創刊以来の記事がデータベース化されている朝日新聞、読売新聞の2紙を対象に外濠、内濠に関する記事を抽出する。

抽出した記事を年代、対象となる濠や場所について整理し、その内容から二つの濠の違いや共通する傾向を考察する。

2. 調査対象

(1) 対象範囲

外濠は江戸城外郭を取り囲む濠の総称である。文脈や著書によって神田川、日本橋川を含んで指す場合と現存する牛込濠から弁慶濠のみを指す場合があるが、本研究では飯田濠から弁慶濠の西側部分に加えて神田川、日本橋川、外濠川及び旧溜池を「外濠」として対象とする。また、内濠は皇居内部に位置する道灌濠、蓮池濠、白鳥濠、天神濠を除いた外側の濠を対象とする(図-1)。

(2) 対象記事

創刊以来の記事がデータベース化されている朝日新聞・読売新聞の1875年から1989年までの記事を対象とした。抽出する記事は江戸城外濠・内濠を指すワードとし

て「外濠」「外堀」「内濠」「内堀」「お濠」「お堀」を含むものとした。

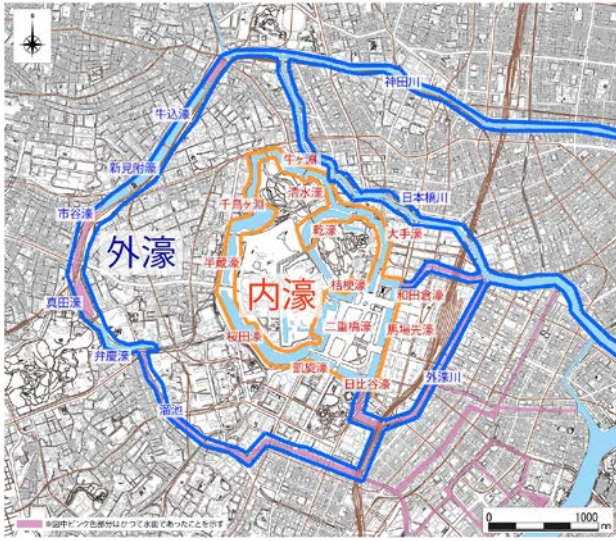


図-1 研究対象地

3. 新聞記事の分類

新聞記事を抽出した結果、記事数は外濠が267件、内濠が467件となった。

抽出した記事に対し「年代別」「場所別」「内容分類別」に分けて、分析・考察を行った。また、記事が対象とする場所を地図上にプロットした。記事の内容分類は(表-1)のとおりである。考察にあたり行政資料および文献等から外濠・内濠周辺の時代背景を把握し、補足的に参照した。

表-1 記事内容の分類と記事数

	外濠	内濠	計
埋立浚渫	61	16	77
汚濁浄化	13	58	71
公園	24	11	35
事件	49	78	127
写真	4	47	51
水面	6	14	20
投書社説	38	43	81
投身	23	91	114
利活用(水面)	7	36	43
利活用(濠治い)	10	42	52
土手石垣	20	21	41
その他	8	7	15
計	263	464	727

4. 年代ごとの考察

(1) 戦前の傾向

1870年～1900年にかけての記事を見ると、無断で釣りをして逮捕者が出たという記事や甲武鉄道敷設の際にお濠の鮎、鯉を擁護するように求めた記事が見られる。明

治に入っても江戸時代からの殺生禁止の風潮が残っていたものと考えられる。

1890年代に入ると外濠では埋立浚渫、土手石垣に関する記事が増加しており、記事数は1890年代の外濠の記事全25件中14件を占める。これは1889年から始まった東京市区改正に伴うものであると考えられる。

1920・1930年代では、外濠の記事数は100件、内濠では112件と大幅に増加した。外濠では1924年に初めて外濠公園の計画を報じており、1936年の開園までに22件もの記事数が取り上げられている。また、1920年代には水質浄化に関する計画、実験も報じられている。

内濠では汚濁浄化に関する記事が25件取り上げられている。掘抜き井戸や浄水の導入による水質浄化、玉川上水の復活計画など積極的な水質実験が行われた。中でも玉川上水の復活は紀元2600年記念事業の一環で行われ、1940年に通水が行われたことが報じられている。

(2) 戦後の傾向

1950年代の内濠の記事数は95件。1960年代の記事数は105件となった。戦前に比べると大幅に増加したことが

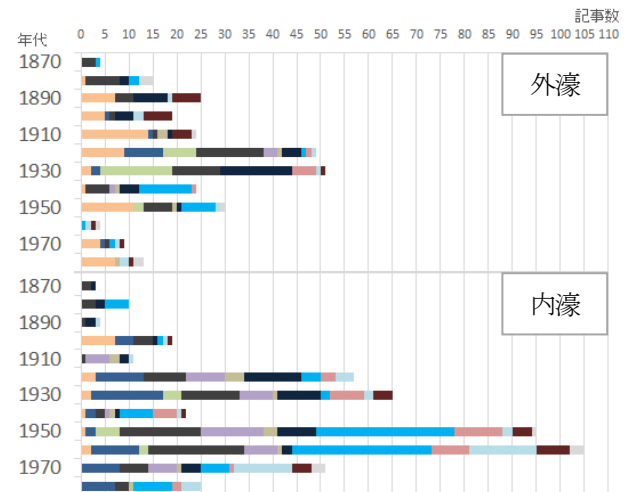


図-2 各年代における外濠・内濠の記事数と内容分類

表-2 各年代別 外濠・内濠の記事傾向

年代	外濠	内濠
1870・1890	釣りの禁止や動植物の擁護など、殺生禁止の風潮が残る	
1900・1910	市区改正に伴う外濠川の埋立および浚渫	凱旋道路建設に伴う埋立
	水質の汚濁について取り上げ始める	
1920・1930	水質浄化計画の浮上・浄化実験	
	外濠公園の計画の具体化	・水質浄化計画の具体化 ・紀元2600年記念に合わせた内濠周辺の美化活動
1940	戦中	お濠での鯉の養殖による食糧増産
	戦後	外濠川の埋立 釣りの解禁
1950・1960	・弁慶濠でのホテル狩りやボート場開設についての記事 ・外濠川を中心とした埋立について	・白鳥の飼育、コイの放流など、水面の利活用が盛んに行われる ・内濠の風景を写した写真の記事が頻りに取り上げられる
	1970	飯田濠の埋立
1980		水質浄化計画について

分かる。特に利活用水量が多く、1954年から飼育を始めた白鳥に関して54件もの記事が取り上げられている。

外濠でも利活用水量に関する記事が7件取り上げられており、ボート場の整備やホテル狩りなどが弁慶濠で行われたことを報じている。同時に、外濠では1953年から1957年にかけて高速道路建設に伴う数寄屋橋付近の外濠川の埋立を報じた記事が9件見られた。

また、内濠では1950年から60年代にかけて風景を写した写真だけの記事が20件見られる。季節の変化や動植物に関する記事で内濠の写真が多く使われている。新聞の印刷や写真の技術が進歩したことにより紙面上に頻繁に写真が使われるようになったものと考えられる。一方で、外濠では殆ど見られない。

1970年代以降は内濠では汚濁浄化の記事が15件取り上げられている。「お堀 よみがえれ “自然の摂理” 作戦」(1978.10.27 読売)では、1965年に内濠に余水を送水していた淀橋浄水場の廃止に伴い水源が絶たれ死のお濠になってしまった内濠に対して環境省が水質クリーン作戦を本格的に取り組み始めたことと報じている。この記事では井戸による地下水の導入を報じているが、この他にも地下鉄駅の湧水の導入や玉川上水の再度復活、水質浄化施設の設置など、様々な計画が取り上げられた。

一方で、外濠では内濠のような水質浄化に関する記事は見られず、飯田濠の埋立計画が具体化したことで埋立浚渫に関する記事が11件取り上げられている。

(3) まとめ

外濠では埋立や浚渫、公園計画など、濠やその周辺での大きな計画に関する記事が大半を占める一方で、内濠では水質浄化や水面の利活用に関する記事が多い。また、写真を用いて水面の様子や季節の変化を報じた記事は外濠では見られないが、内濠では1920年ごろから見られるようになる。

このように、外濠と内濠で記事の内容が大きく異なる傾向があることが確認できた。

5. 特徴的課題の考察

外濠・内濠での特徴的な話題について取り上げて考察を試みた。

(1) 水質浄化の取り組み

外濠・内濠の水質浄化の記事変遷を(表-3)に示した。

1925年に初めて水質浄化に関する具体的な計画が取り上げられる。これは、当時の中村東京市長が徹底的な改良を行うよう命じ、玉川上水の余水の活用と掘り抜き

井戸の掘削の2案が計画されたことが報じられている。その後、掘り抜き井戸案は外濠・内濠共に試験掘りまで実施されたものの、新たに就任した西久保東京市長が経費削減の意向から中止させたことが「『お濠の水を綺麗に』へ市長また槍を出す 工事中の物は取止め」(1926.12.15 読売)という見出しで報じられている。

1933年になると再びお濠の浄化について話題が上がる(図-4)。これは上水の直接引込みという大胆な水質浄化計画を報じており、1次計画として内濠の浄化が行われた。一方で同じ頃、水質浄化が進まなかった外濠では外濠川を中心に埋立による都心の浄化が計画された(図-5)。

その後、内濠では1935年から1940年にかけて紀元2600年記念行事に合わせて玉川上水の復活計画が浮上する(図-6)。この記事では外濠は2次計画として送水が行われると報じているが、実際には実現せず終戦を迎えている。

戦後、内濠では1965年に淀橋浄水場が廃止されると大気汚染も相まって水質が再び悪化した。「フナ 酸素不足でアップアップ お堀にきれいな水を」(1972.4.20 朝日)という見出しからは環境悪化が窺える。その後、再び水質改善の機運が高まり、1980年代には、「皇居のお堀ちよっぴり浄化 都が計画 20数年ぶり玉川上水の水」(1985.8.20 朝日)、「皇居が東京駅から“もらい水” 地下駅建設で湧出分 環境庁計画 お堀に流し浄化作戦」(1986.2.5 朝日)等の記事が報じられている。一方、外濠では戦後、具体的な水質

表-3 外濠・内濠の水質浄化に関する記事の変遷

年	外濠	内濠
1925~1927	1925の記事で初めて水質浄化の具体的な計画が取り上げらる。玉川上水の余水を活用、掘り抜き井戸を掘削し水源とする2案⇒掘り抜き井戸が試験掘りされたが予算の都合から中止	
1933	—	浄水を引込んで水を入れ替える様子が取り上げられる
1935	・外濠では史跡指定を前に水質浄化が取り上げられる ・玉川上水を外濠、内濠へ導水する計画が再び取り上げられる	
1936~1940	玉川上水案実行。内濠への送水工事開始。 外濠は2次計画であったが未着工に終わる。	1940 紀元二千六百年記念行事に合わせて内濠への送水が開始。
	外濠川の埋立計画。埋立により衛生環境の改善を図るための記述。	
1963	外濠川の埋立。外濠川とその周辺の運河は水質の悪化を埋立により処理した内容の記述。	—
1965	—	淀橋浄水場閉鎖に伴い玉川上水の送水停止。
1972~1978	1972 飯田濠埋立に関する記事。「お堀はごみ捨て場」との記述	・水質悪化の記事が増加 ・環境省による水質調査の記事
1981~1988	1981 飯田濠埋立完了	・清流復活事業による玉川上水の復活構想 ・東京駅地下水の導水 ・濾過装置による浄化実験が取り上げられる。



図4 浄水の直接引き込みの様子
(朝日新聞 1933. 9. 8)

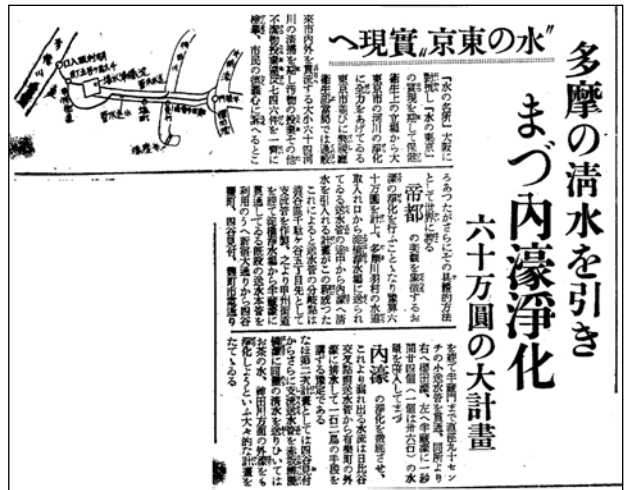


表6 玉川上水を利用した内濠の浄化計画を報じる記事
(朝日新聞 1935. 11. 27)

浄化に関する記事は見られず、水質の悪かった外濠川や飯田濠は埋立が行われた。

一連の流れを見ると、戦前は外濠・内濠共に水質浄化が計画されていたことが確認できるが内濠が優先され、次第に外濠は計画から外されてしまった。戦後、内濠では水質が悪化すると多くの浄化計画が考えられたが、外濠では浄化の計画は記事には見られず、一部の濠では埋立によって処理された。



図5 外濠川埋立計画を報じる記事
(朝日新聞1938. 5. 7)

(2) 市民とお濠の距離

a) 明治

外濠・内濠では江戸時代殺生が禁止されていた。明治期の新聞記事を見ると「フナに投石の船大工に罰金」「禁制の地引き網で漁獲」「甲武鉄道のトンネル工事に『待った』 お堀の鯉魚擁護で東京府が注文」等の記述が見られる。このような記事は明治末期になっても見られる。このことから明治時代は江戸からの殺生厳禁の風潮が引き続きあり、お濠は神聖な場所であり市民とお濠の距離はそれほど近いものではなかったと考えられる。

b) 大正

殺生に関する記事は見られなくなり 1918 年には牛込濠にボート場が開設、1924 年には外濠を親水公園とする計画が取り上げられる (図-7)。一方で 1919 年には弁慶濠の埋立計画が数か月に渡り取り上げられ紙面上を賑わせた。大正に入ると防衛線ではなくなった外濠では公園やボート場の開設など広大なスペースの活用が考えられ始める。

c) 昭和(戦前)

外濠では 1924 年～1936 年にかけて外濠公園に関する記事が 22 件取り上げられている。内濠では電線の地中化や遊歩道の整備が進み、濠沿いの空間が市民に開放されたとの記述が見られた。都市化が進んだ中で濠周辺が貴重な風景として認識されはじめたと考えられる。

d) 戦中

食糧の確保のため 1941 年から外濠は新見附濠、内濠は日比谷濠で食用鯉の養殖が行われたことが報じられている。地元の少年が養殖鯉を勝手に釣っていることが問題になっていることが取り上げられており(図-8)、お濠が遊び場として機能していたことが分かる。

e) 昭和(戦後)

内濠ではボート場が開設、白鳥の飼育も行われ利活用が盛んに行われた。一方で外濠では飯田濠、弁慶濠でボート場など僅かな利用が見られるものの真田濠・飯田濠・外濠川の埋立が行われ市民とお濠の距離は離れてしまったと考えられる。

このような流れを見ると、外濠・内濠共に濠および濠沿いの整備が進み、外濠では埋立により市民と濠との距離が遠くなってしまったが、内濠では白鳥の飼育やボート遊び等のリラクゼーションの場として市民に近い存在に変化したと考えられる。

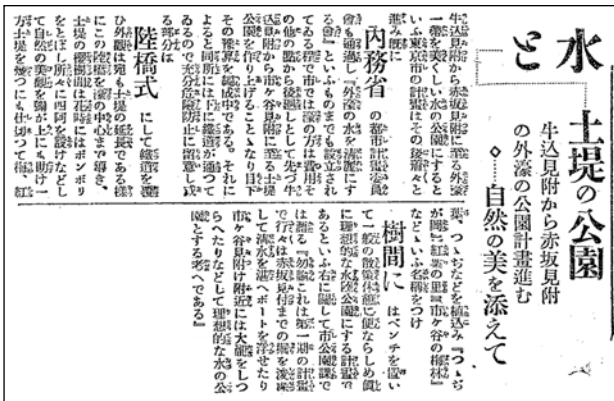


図-7 外濠の親水公園計画を報じる記事 (読売新聞 1925. 8. 26)



図-8 外濠で養殖鯉を釣る少年たち (朝日新聞 1941. 8. 27)

6. まとめ

(1) 結論

本研究では、新聞記事データベースを利用し、外濠・内濠に関する新聞記事を年代・場所・内容分類ごとに、分析・考察を行った。主な結論は以下の4点である。

- 外濠では埋立に関する記事が多く、埋立や公園など大きな計画がある時のみ取り上げられていることを指摘した。
- 内濠では1920年以降、水面の様子、水質浄化を報じる記事が各年代多く見られることを指摘した。
- 特徴的なトピックとして「水質浄化の取り組み」「市民とお濠の距離」を取り上げ、考察した。
- 内濠では特にニュースがなくても濠の様子が取り上げられているが、外濠ではそのような傾向は見られないことを指摘した。

(2) 課題

a) 対象新聞

本研究では一般的な全国紙として朝日新聞と読売新聞の2紙を用いて研究を行ったが、より地域に近い情報は地方紙や地域紙から抽出することが必要であると考えられる。

b) 抽出ワード

本研究では、「外濠・外堀・内濠・内堀・お濠・お堀」というワードで新聞記事の抽出を試みたが、記事数が少ない濠や年代があった。従って、濠名や町名で抽出することが必要であると考えられる。

c) 写真のみの記事および紙面上の配置

今回、写真のみの記事の内容には触れていない。写真の対象、撮影地、また紙面上の配置について調査することで、社会的関心の傾向を掴むことができると考える。

参考文献

- 1) 読売新聞：ヨミダス歴史館, <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
- 2) 朝日新聞：聞蔵ビジュアル, <https://database.asahi.com/library2/login/login.php>
- 3) 法政大学エコ地域デザイン研究所：外濠—江戸東京の水回廊, 鹿島出版会, 2012
- 4) 千代田区, 港区, 新宿区, 史跡江戸城外堀保存計画書, 2008
- 5) 特別区議会：東京都区長委任条項沿革, 1980
- 6) 石原成幸：東京の中小河川の都市計画に関する歴史的経緯, 都土木技術支援・人材育成センター年報, 2009
- 7) 石原成幸：東京の河川に係わる管理体制と改修計画の経緯, 都土木技術支援・人材育成センター年報, 2010